

売られた俺を買ったのは片思いの 相手だった

～オークションから始まる歪んだ溺愛調教～

第1話 落
札

2

第2話 車内
16

第3話 調教初日
30

第4話 首輪と尻尾
46

第5話 あぐら
61

第6話 縄と沈黙
75

第7話 第三者
89

第8話 放置
103

第9話 鏡の中
119

第10話 墓地
134

第11話 完全な所有
149

第1話 落札

地下への階段を降りるたび、空気が重くなっていく。

コンクリートの壁に反響する足音。先を歩く男の背中だけを見つめながら、七瀬透真は唇を噛んだ。

逃げ出したい。

でも、逃げる場所なんてどこにもない。

「ここだ。中に入れ」

男が指し示したのは、薄暗い控室だった。

パイプ椅子がいくつか並んでいる。壁際には、透真と同じように連れてこられたらしい人間が数人。誰もが俯き、目を合わせようとしない。

首には全員、番号札がぶら下がっていた。

「お前は23番だ」

冷たいプレートが首にかけられる。

金属の重みが、自分がもう人間ではないことを突きつけてきた。

三年間、部屋に引きこもっていた。

大学を中退し、親の借金を知り、そして今日。

気づけばここにいた。

何もかもが夢のようで、でも首元の番号札だけがやけに現実だった。

「23番、お前の番だ。出る」

どれくらい待ただろう。

名前ではなく番号で呼ばれ、透真は立ち上がった。

足が震えている。

それでも歩くしかなかった。

スポットライトが眩しい。

舞台の上に立たされた透真は、客席を見下ろした。

暗闘の中に、いくつもの視線を感じる。
品定めをする目。値踏みをする目。
吐き気がした。

「23番。二十三歳、男性。健康状態良好」

司会者が淡々と読み上げる。
自分のことなのに、他人事のように聞こえた。

「では、入札を開始します」

数字が跳ね上がっていく。
五百万、八百万、一千万。
自分の値段が上がるたびに、透真は目を閉じた。
誰に買われるんだろう。
何をされるんだろう。
考えたくなかった。

「一千五百万」

低い声が響いた。
場がざわめく。
透真は思わず目を開けた。

「一千五百万の方、他にいらっしゃいますか」

沈黙。

「では、23番は一千五百万円で落札です」

拍手が起こる。
透真は自分を買った人間を見ようとした。
暗闘の中、立ち上がる影。
長身の男がゆっくりと近づいてくる。

スポットライトの光が、その顔を照らした瞬間。
透真の心臓が止まった。

「久しぶり、透真」

聞き覚えのある声。
忘れられるはずのない顔。
高校時代、毎日のように目で追っていた横顔。

「りょう、すけ」

朝霧涼介が、そこにいた。

「こっちだ」

涼介に腕を引かれ、控室へと連れ戻される。
頭の中が真っ白だった。
なぜ。どうして。涼介がここに。
質問が渦を巻くのに、声が出ない。

「座れ」

パイプ椅子に押し付けられる。
涼介が目の前に立った。
スーツ姿。整った顔。高校の頃より少し大人びて、でも面影は確かにある。
芸能プロデューサーになったと、風の噂で聞いていた。

「なん、で」

やっと声が出た。
涼介は答えない。
代わりに、透真の顎を掴んで上を向かせた。

「痩せたな」

低い声。
指先が震えているのが分かる。
涼介の目が、妙に据わっていた。

「三年、探した」

息を呑む。

涼介の手が、透真の頬を撫でる。

「お前が大学辞めたって聞いて、実家に行った。でも誰もいなかった。住所を調べても、転々としてた。やっと見つけたと思ったら、こんなところで」

声が少し上ずっている。

あの涼介が。

クラスを中心にいて、誰からも好かれていて、いつも余裕があった涼介が。

「どうして、探したの」

「決まってる」

涼介が透真の首にかかった番号札を外した。

金属が床に落ちる音が、やけに大きく響いた。

「お前が欲しかったから」

心臓が跳ねた。

涼介の手が、透真のシャツのボタンに伸びる。

「何、を」

「商品確認」

涼介の目が、ぎらりと光った。

「俺が買ったんだ。全部見せろ」

ボタンが一つずつ外されていく。

透真は抵抗しようとした。でも体が動かない。

涼介の指が冷たい。緊張しているのだと、どこかで分かった。

「待っ、て」

「待たない」

シャツが肩から滑り落ちる。
三年間、ほとんど外に出なかった体は白く、細い。
鎖骨が浮き出ている。あばらの形がうっすらと見える。
涼介の視線が、透真の胸元で止まった。

「こんなに細くなって」

指先が鎖骨をなぞる。
透真の体が、びくりと震えた。
涼介の呼吸が、わずかに荒くなっているのが分かる。

「やっ」

「感じるのか、ここ」

涼介の親指が、透真の乳首に触れた。
淡い桃色をしたその突起が、触れられた瞬間に硬くなる。
ぷっくりと膨らんで、自己主張を始めた。

「あっ」

声が漏れた。
涼介の目が、大きく見開かれる。

「すごい反応。触っただけなのに」

今度は両方の乳首を、人差し指と親指で挟んだ。
くりくりと円を描くように刺激される。
硬くなった乳首が、涼介の指の腹に擦れるたびに痺れるような快感が走った。

「ひっ、あ、やめ」

「やめない。これが商品確認だ」

涼介の指が、乳首を軽く引っ張った。
ぶにと伸びた乳首が、離れた瞬間に弾ける。
透真の背中が反った。
じわりと熱が、下腹部に集まっていくのを感じた。

「乳首だけでこんなに感じるなんて」

涼介の声が震えている。

片方の乳首を指で弄びながら、もう片方に唇を寄せた。

「えっ、待っ」

熱い舌が乳首を舐めた。

ぺろり、と先端を転がされ、透真の腰が跳ねる。

舌先で突起をつつかれ、くるくると回される。

「んんっ」

吸われた。

じゅぷ、と音を立てて乳首を口に含まれ、強く吸い上げられる。

赤ん坊が母乳を求めるように、ちゅうちゅうと吸い付かれた。

同時に、反対側の乳首を爪の先で搔かれた。

「あ、あああっ」

二つの異なる刺激。

片方は濡れた熱さ。片方は鋭い刺激。

それが同時に乳首を襲い、透真の頭が真っ白になりかけた。

気づけば、透真のペニスが下着の中で硬くなり始めていた。

ズボン越しにも分かる膨らみ。

涼介が口を離し、それを見下ろした。

「勃ってる。乳首舐めただけで」

低い声。

涼介の手が、ズボンのベルトに伸びる。

金具が外れる音。ジッパーが下りる音。

全てが鮮明に聞こえた。

「やめて、それは」

「見せろって言った」

ズボンが引き下ろされる。
白い下着の中で、透真のペニスが存在を主張していた。
まだ完全には勃起していない。でも、明らかに膨らんでいる。
下着の布地が、先端の形を浮かび上がらせていた。

「ここも確認する」

涼介の手が、下着の上から透真のペニスを掴んだ。
布越しに伝わる体温。
輪郭をなぞるように、指先が形を確かめていく。

「大きさは普通くらいか。でも、形がいい」

透真は目を閉じた。
こんな形で褒められても、恥ずかしいだけだった。

「見ろ。自分の体を」

顎を掴まれ、下を向かされる。
涼介の手が、下着の中に侵入していく。
下着のゴムを越え、陰毛を掻き分け、直接ペニスに触れた。

「あっ」

皮膚と皮膚が触れ合う。
涼介の手のひらは、思ったより温かかった。
細い指がペニスを握り、根元から先端へとゆっくり動く。

「三年間、誰かに触られたか」

「そんな、こと」

「答えろ」

強く握られた。
透真は息を吞んで、首を振る。

「ない。誰にも」

「自分では」

「えっ」

「自分で触ったか。オナニーしたか」

顔が熱くなる。

涼介は本気で聞いていた。

「し、た」

「どのくらい」

「週に、二、三回」

涼介の手が、ぴくりと動いた。

「何を想像した」

「そんなの」

「答えろ」

また強く握られる。

涼介の目が、異様な熱を帯びていた。

「涼介のこと」

絞り出すように答えた。

三年間、ずっと。

高校時代の涼介を思い出しながら、自分で自分を慰めていた。

「そうか」

涼介の声が、かすれた。

その安堵と歓喜が、透真の胸を締め付けた。

「じゃあ俺が最初だ」

涼介の手が動き始める。

最初はゆっくりと。根元を握り、先端まで扱き上げ、また根元へ戻る。

シュコ、シュコと小さな音が立った。

「っ、あ」

透真のペニスが、涼介の手の中で完全に勃起していく。
血管が浮き出るほどに張り詰め、先端の亀頭が赤黒く充血する。
包皮が完全にめくれあがり、鈴口がぱっくりと開いた。

「大きくなった。熱い」

涼介が呟く。
親指で亀頭の裏側をなぞった。
カリの部分を重点的に刺激され、透真の腰が揺れる。

「そこ、あっ、だめ」
「ここが気持ちいいのか」

今度は亀頭全体を包み込むように握った。
くちゅ、と音がする。
先端から滲み出た先走り液が、涼介の手を濡らしていた。

「もう出てる」

涼介の指が、尿道口を擦った。
透明な液体がじわりと溢れ、指の腹に絡みつく。
ねっとりとした糸を引いて、涼介の指と亀頭を繋いだ。

「やっ、そこ、触らないで」
「なんで。気持ちいいだろ」

親指で尿道口を押さえつけられる。
ぐりぐりと円を描くように刺激され、透真の目から涙が溢れた。
先走り液が溢れ続け、涼介の手をてらてらと濡らしていく。

「あ、あ、あ」

声が止まらない。
涼介の手が速くなる。
先走り液を潤滑剤にして、シュコシュコと淫猥な音が響く。
ぐぷ、ぐぷと粘った音が、静かな控室に反響した。

「すごい量だ。お前、こんなに感じてたのか」

涼介の呼吸も荒くなっていた。
透真のペニスを握る手に、力がこもる。

「高校の頃から、お前のこと見てた」

耳元で囁かれた。
涼介の舌が、透真の耳たぶを舐める。

「ひあっ」

耳が異常に敏感なのは、自分でも知っていた。
でも、他人に触れられたのは初めてで。
全身に電流が走ったような快感だった。

「ここも弱いんだ」

涼介の舌が、耳の穴に侵入してくる。
ずぶり、と入り込んで、内側を舐め回された。
ぺちゃ、ぺちゃと湿った音が、耳元で響く。
全身が震えた。

「やっ、だめ、耳は」
「だめって言われると余計にしたいくなる」

耳を責められながら、ペニスも扱かれ続ける。
二重の刺激に、透真の頭が真っ白になっていく。

「出そう、イきそう」
「まだだめだ」

涼介の手が、ペニスの根元を強く握った。
射精を止められる。
透真は悲鳴のような声を上げた。

「やだ、出して、出させて」
「その前に聞きたいことがある」

涼介が透真の顔を覗き込む。
汗ばんだ額。涙で濡れた頬。快感に歪む表情。
それを、涼介は食い入るように見つめていた。

「俺に触られて、気持ちいいか」
「そんな、こと」
「答える。じゃないと出させない」

ペニスの先端を親指でぐりぐりと刺激される。
尿道口から、先走り液がとめどなく溢れ続けていた。
亀頭全体がてらてらと濡れて、光を反射している。

「気持ち、いい」

絞り出すように答えた。
涼介の目が、満足そうに細まる。

「もう一回言え」
「気持ちいい。涼介に触られて、気持ちいい」

涼介が息を呑んだ。
次の瞬間、透真の体が床に押し倒されていた。

「立てない。お前がそんなこと言うから」

涼介が透真に覆いかぶさる。
スーツ越しに、涼介の勃起が太ももに当たった。
硬い。熱い。大きい。

「ずっと我慢してた」

涼介の手が、再び透真のペニスを握る。
今度は容赦がなかった。
激しく上下に動かされ、シュコシュコと粘った音が部屋に響く。
先走り液が飛び散り、涼介の手首まで濡らしていた。

「あ、あっ、あああ」

透真の腰が勝手に浮く。
涼介の手に合わせて、腰を振ってしまう。

「腰振ってる。お前から求めてる」
「ち、がう」
「違う」

涼介がペニスを扱きながら、もう片方の手で睾丸を掴んだ。
卵型のそれを、指で転がすように揉まれる。
袋の中で二つの玉が踊り、じんわりと熱を持った。

「ひっ、そこも」
「ここも感じるんだ」

睾丸を軽く引っ張られた。
透真の背中が、大きく弓なりになる。
二つの玉が指の間で弄ばれ、快感と痛みの境目を行き来する。

「イク、もう無理、イク」
「イケ。俺の手の中でイケ」

涼介がペニスの先端を強く握った。
亀頭を包み込むように刺激される。
その瞬間、透真の体が大きく震えた。

「あ、ああああっ」

射精。
白濁した精液が、涼介の手を汚す。
びゅるる、びゅると何度も脈打ち、溢れ出していく。
勢いよく噴出した精液が、涼介の指の間から零れ落ちた。
一発、二発、三発。
止まらない。
四発、五発。
透真の腹の上にまで飛び散った。
最後の一発が、力なく涼介の手の甲を汚した。

「すごい。こんなに出して」

涼介の声が震えている。
まだペニスは痙攣を続けていた。
射精の余韻で、びくびくと跳ねる。
尿道口から、残りの精液がとろりと溢れ出した。

「三年分か」

涼介が、精液で濡れた手を見つめている。
白濁した液体が、指の間を糸を引いて流れていく。
その目が、どこか狂っていた。

「嘘だと思うかもしれないけど」

涼介が、精液のついた指を透真の唇に押し当てた。
反射的に口を開けてしまう。

「んっ」

自分の精液の味がする。
苦くて、生臭くて、でも涼介の指の感触が妙に心地よかった。
指を舐めさせられながら、透真は涼介を見上げる。

「俺も、高校の頃から、お前のことが好きだった」

涼介の声が震えている。

「お前の写真で、何度も抜いた。何百回も」

告白だった。
歪んだ、でも紛れもない。

「俺も」

気づけば口にしていた。

「俺も、涼介のこと、ずっと好きだった」

涼介の目が、ぐらりと揺れた。
次の瞬間、唇を塞がれていた。
深い口づけ。舌が侵入してきて、口の中を蹂躪される。

「んっ、んん」

息ができない。
涼介の舌が口の中をかき回す。
唾液が混ざり合い、ちゅぶちゅぷと音が立つ。

長い口づけの後、涼介が唇を離した。
糸を引く唾液。
透真は荒い息を繰り返しながら、涼介を見上げた。

「着替えを持ってこさせる。待ってろ」

涼介が立ち上がった。
精液で汚れた手を、ハンカチで拭く。
透真は床に横たわったまま、動けなかった。

「待って」
「何だ」
「これから、どうなるの。俺」

涼介が振り返った。
その目が、複雑な光を帯びている。

「俺の家に来い。お前はもう、俺のものだ」
「でも」
「高校のとき、お前に言いたいことがあった」

涼介の声が、少し震えた。

「今度こそ、全部言う。だから」

涼介が透真の髪を撫でた。

「逃げるなよ」

第2話 車内

地下駐車場に停められていたのは、黒い高級車だった。
スモークガラスが、外からの視線を完全に遮断している。
涼介が後部座席のドアを開けた。

「乗れ」

命令口調。
でも声が少し上ずっているのが分かった。
透真は黙って車に乗り込んだ。

革張りのシートが、冷たく体を受け止める。
涼介が反対側から乗り込み、ドアを閉めた。
狭い空間に、二人きり。
透真の心臓が、痛いほど鳴っていた。

「運転は」
「いない。今日は俺が運転する」

涼介がエンジンをかけた。
静かな振動が、シートを通じて伝わってくる。
車がゆっくりと動き出した。

夜の街を走る。
スモークガラス越しに、ネオンの光がちらちらと見える。
外の世界が、遠い場所のように感じられた。

「どこに行くの」
「俺のマンション」

涼介の声は平坦だった。
でもバックミラー越しに見える横顔は、どこか緊張している。

「涼介」
「何」

「さっき言ってたこと、本当なの」

三年探した、と涼介は言った。
高校の頃から好きだった、とも。
信じられなかった。
あの涼介が、自分のような存在を。

「疑ってる？」

涼介が信号で車を止めた。
振り返って、透真を見る。
その目が、まっすぐだった。

「証拠を見せてやる」

涼介がスーツの内ポケットに手を入れた。
取り出したのは、一枚の写真。
色褪せた、古い写真だった。

「これ」

透真は息を呑んだ。
写真に映っているのは、高校時代の自分だった。
体育祭の日。走り終わって、汗を拭いている横顔。
自分では覚えていない瞬間。

「いつ、これ」

「高校二年の体育祭。お前が八百メートル走った日」

涼介の声が震えていた。

「こっそり撮った。バレたら気持ち悪がられると思って」
「ずっと、持ってたの」
「財布に入れてた。毎日見てた」

涼介が写真を透真に渡した。
受け取った手が、震えている。
五年以上前の自分。

それを涼介は、ずっと持ち歩いていてた。

「お前が消えてからも、これだけが手がかりだった」

涼介が透真の髪を撫でた。

信号が青に変わる。

車が再び動き出した。

「信じられない、って顔してる」

「だって、涼介は」

「モテてたから？ 女子にチヤホヤされてたから？」

涼介が自嘲気味に笑った。

「全部どうでもよかった。お前だけ見てた」

車が高速道路に入った。

夜景が流れていく。

涼介が車を路肩に寄せ、停車した。

「ここなら誰も来ない」

涼介が後部座席に移ってきた。

透真の隣に座る。

狭い空間が、さらに狭くなった。

「さっきの続き、していいか」

涼介の目が、熱を帯びている。

透真は答えられなかった。

答える前に、唇を塞がれていた。

「んっ」

深い口づけ。

涼介の舌が侵入してきて、口の中を探る。

唾液の音が、静かな車内に響いた。

唇が離れる。

糸を引く唾液。

透真は荒い息を繰り返した。

「涼介、待って」

「何」

「ここ、外から見える」

スモークガラスとはいえ、完全に安心はできない。

涼介が笑った。

「見えない。でも」

涼介が透真の体の向きを変えた。

窓側を向かされる。

「窓ガラスには映る」

透真は息を呑んだ。

暗いスモークガラスが、鏡のように二人の姿を映していた。

涼介に後ろから抱きしめられている自分。

頬が赤い。目が潤んでいる。

「見ろ。お前の顔」

涼介の手が、透真のシャツのボタンに伸びた。

さっき控室で着替えたばかりの、新しいシャツ。

それが、また脱がされていく。

「また、脱がすの」

「何度でも」

ボタンが外れていく。

一つ、二つ、三つ。

透真の白い胸が露わになっていく。

その様子が全て、窓ガラスに映っていた。

「嫌だ、見たくない」

「見ろって言った」

涼介が透真の顎を掴み、窓の方を向かせた。

逃げられない。

自分の痴態を、見せつけられる。

涼介の手が、透真の乳首に触れた。

さっき散々弄られた場所。

まだ赤く腫れている。

「まだ敏感だ。見ろ、乳首立ってる」

窓ガラスに映る自分の胸。

確かに乳首が硬くなって、ぷっくりと膨らんでいた。

淡い桃色が、充血して赤みを帯びている。

「あっ」

指先でつままれる。

くりくりと回されて、透真の腰がびくりと跳ねた。

窓ガラス越しに、自分の体が反応するのが見えた。

「さっきより反応いいな。もう体が覚えたのか」

涼介の指が乳首を引っ張る。

ぷにっと伸びて、離すと弾ける。

その度に電流のような快感が走った。

窓ガラスに映る自分の乳首が、涼介の指に弄ばれている。

「やだ、見ながらは恥ずかしい」

「だから見せてる」

今度は爪の先で乳首の先端を掻いた。

硬くなった突起を、執拗に刺激される。

「ひあっ、あ、あ」

声が漏れる。

窓ガラスに映る自分は、乳首を弄られて喘いでいた。

口が半開きになって、涎が垂れそうになっている。

恥ずかしい。

でも目を閉じると、涼介に叱られる。

「両方同時にしてやる」

涼介の両手が、それぞれの乳首を捕らえた。

親指と人差し指で挟み、くりくりと回転させる。

左右で微妙にタイミングがずれていて、脳が混乱した。

「あ、あ、あああ」

右の乳首を強くつまんだかと思うと、左は優しく撫でる。

そして次の瞬間、左を強く引っ張り、右は軽く弾く。

予測できないリズムに、体が翻弄された。

「お前の乳首、本当に敏感だな。男なのに女みたいに勃起してる」

涼介が乳首をぐりぐりと押し込んだ。

硬く勃起した突起が、胸の中に沈み込む。

指を離すと、ぷっくりと戻ってくる。

それを何度も繰り返された。

「やだ、乳首が、変になる」

「変になれ。俺好みに」

腰が勝手に揺れる。

背中が涼介の胸に押し付けられた。

涼介の心臓の音が、背中越しに伝わってくる。

速い。涼介も興奮している。

「乳首だけでこんなに濡れるんだな」

涼介の視線が、透真の股間に向いた。
ズボンの中で、ペニスが硬くなり始めている。
先端が湿っているのが、布越しにも分かった。
窓ガラスにも、股間の膨らみがはっきりと映っている。

「下も脱がす」

ベルトが外される。
ジッパーが下りる。
ズボンと下着を一緒に引き下ろされ、透真のペニスが解放された。
びくん、と跳ねて、窓ガラスに影を落とす。

「もう勃ってる。乳首舐めただけで」

窓ガラスに、全てが映っていた。
上半身は乳首を弄られ、下半身は勃起したペニスを晒している。
ペニスの先端から、透明な液体が一滴、垂れ落ちた。
情けない姿。
でも涼介の手が触れると、体が勝手に反応した。

「触って、ほしいか」

「え」

「さっきみたいに。俺に触ってほしいか」

涼介の手が、ペニスのすぐ近くをなぞる。
太ももの内側。敏感な場所。
でも肝心の場所には触れない。

「言わないと触らない」

焦らされている。
透真は唇を噛んだ。
言いたくない。
でも、ずきずきと疼くペニスが、涼介の手を求めている。
窓ガラスに映る自分のペニスが、びくびくと脈打っている。

「触って」

小さな声で言った。
涼介の息が、耳にかかる。

「もっとちゃんと言え」
「涼介に、触ってほしい」

涼介の手が、ペニスを握った。
根元からしっかりと。
透真は声を上げた。

「あっ」

ゆっくりと上下に動かされる。
先端に触れるたびに、先走り液が溢れ出した。
涼介の手のひらが、ぬるぬると滑る。
シュコ、シュコと音が立ち、窓ガラスに手の動きが映る。

「すごい量。お前、そんなに溜まってたのか」

ちがう、と言いたかった。
さっき出したばかりなのに、また溢れている。
涼介に触られると、体が勝手に反応してしまう。

「今日は、ここだけじゃない」

涼介の空いている手が、透真の尻に伸びた。
柔らかい臀部を、ぎゅっと握られる。

「え」
「後ろも、確認する」

涼介の指が、臀部の割れ目をなぞった。
透真の体が強張る。

「待っ、そこは」
「逃げるな」

涼介の指が、後孔の入り口に触れた。

ぴくり、と透真の体が跳ねる。

窓ガラスに、涼介の手が透真の尻に伸びているのが映っていた。

「触られたこと、ないだろ」

「ある、わけ」

「じゃあ俺が最初だ」

涼介がポケットから何かを取り出した。

小さなボトル。

ローションだった。

「いつの間に」

「準備はしてあった。お前を見つけたときから」

ボトルの蓋が開く。

とろりとした液体が、涼介の指にかけられた。

透明なローションが、涼介の長い指を濡らしていく。

「力抜け。じゃないと痛い」

ぬるぬるの指が、再び後孔に触れた。

冷たい感触に、透真の体が震える。

「冷た」

「すぐ温まる」

涼介の指が、後孔の周りを円を描くように撫でた。

くすぐったいような、むず痒いような。

経験したことのない感覚だった。

後孔がひくひくと収縮して、涼介の指を招き入れようとしている。

「窓を見ろ」

涼介に命じられ、透真は窓ガラスを見た。

映っているのは、足を開かされた自分。

涼介の手が股間に伸び、後ろに回っている。

恥ずかしい格好。

でも目を逸らすことを許されない。

「これから俺の指が入るところ、よく見ておけ」

指先が、後孔の入り口を押した。
ぬるりとした感触。
少しずつ、中に入ってくる。
窓ガラスに映る自分の顔が、驚きで歪んでいた。

「あ、あっ、入って」
「力抜け。締めるな」

涼介の指が、第一関節まで入った。
異物感。
体の中に何かがある、という感覚。
奇妙だった。気持ち悪いはずなのに、痛くない。
涼介の指の温度を、中で感じている。

「もう少し」

指がさらに奥へ進む。
第二関節まで。
ずぶり、と音がした。
透真の呼吸が荒くなった。

「入った。お前の中に、俺の指が入ってる」

涼介の声が震えていた。
窓ガラス越しに見える涼介の顔が、紅潮している。
耳まで赤い。
透真を犯しながら、涼介も興奮しているのだ。

「熱い。中、すごい熱い。締め付けてくる」

涼介の指が、ゆっくりと動いた。
中で回転するように、壁をなぞられる。
ぬるぬるとした感触が、内壁を這い回った。

「んっ、変な、感じ」

「痛くないか」

「痛く、ない。でも、へんっ」

指が出たり入ったりする。

ずぶ、ずぶと粘った音が立った。

ローションと腸液が混ざり合って、淫猥な音を奏でる。

窓ガラスに、その音が反響した。

「もう一本、入れる」

涼介の人差し指に、中指が添えられた。

二本目の指が、入り口を押す。

「待って、それは」

「大丈夫。ゆっくりやる」

二本目の指が、ゆっくりと侵入してきた。

今度は少し痛い。

中が引き伸ばされる感覚。

ぐぶり、と二本の指が奥へ進む。

「あ、あっ、いたっ」

「すまない。でも、ここを通らないと」

涼介の指が、中で何かを探るように動いた。

奥へ、奥へと進んでいく。

内壁をなぞりながら、特定の場所を探している。

その時だった。

「ひあっ」

体が大きく跳ねた。

電流が走ったような、強烈な快感。

窓ガラスに映る自分の体が、びくんと弓なりになっていた。

「見つけた」

涼介の声が、低く響いた。

「お前の前立腺」

指先が、その場所を押した。

ぐりっと押し上げられる。

内側から、快感の塊を直接刺激されている。

「あ、あああっ」

声が止まらない。

何だ、これは。

今まで感じたことのない快感だった。

ペニスとは全く違う。

もっと深い場所から、全身に痺れが広がっていく。

「ここを押されると気持ちいいだろ」

涼介の指が、前立腺を執拗に刺激した。

ぐりぐりと押されるたびに、透真の体が跳ねる。

窓ガラスに映る自分は、完全に快楽に溺れていた。

目は虚ろで、口からは涎が垂れている。

「やっ、そこ、だめ、なにか、来るっ」

ペニスから、先走り液がとめどなく溢れていた。

涼介は触っていないのに、ペニスがびくびくと震えている。

先端から透明な液体が糸を引いて、シートに垂れ落ちた。

「後ろだけでイきそうか。すごいな」

「わかんない、わかんないっ」

涼介の指が速くなった。

前立腺を連続で押される。

ずぶずぶと音が響き、透真の腰が勝手に揺れた。

涼介の指を求めて、自分から腰を動かしている。

「腰振ってる。お前、自分から俺の指を求めてる」

「ち、がっ」

「窓を見る。自分の姿を」

窓ガラスに映る自分は、腰を揺らして涼介の指にしがみついていた。
否定できない。
体が勝手に、涼介を求めている。

「あ、あ、イク、イっちゃう」

涼介の空いた手が、透真のペニスを握った。
前と後ろ、同時に攻められる。
シュコシュコと手が動き、中では指が前立腺を押し続ける。

「イケ。俺の指でイケ」

前立腺を強く押し上げられた瞬間。
透真の体が大きく震えた。

「あ、ああああっ」

射精。
さっきより激しい。
白濁した精液が、勢いよく噴出した。
びゅるる、びゅるると何度も脈打つ。
一発目が窓ガラスに飛び散った。
二発目、三発目が車のシートを汚す。
四発目、五発目。
止まらない。
後ろを攻められながらの射精は、今までで一番強烈だった。
最後一滴がとろりと零れ落ちるまで、透真は絶頂の波に吞まれた。

「すごい。窓に飛んだ」

涼介の声が震えている。
まだ指は中に入ったままだった。
射精の余韻で、後孔がびくびくと痙攣している。
その収縮が、涼介の指を締め付けていた。

「締まってる。すごい締まり。俺の指、離さないって言ってる」

涼介の指がゆっくりと引き抜かれる。

ずるり、という感覚。

後孔がぽっかりと開いたような、奇妙な虚無感が残った。

何か入れてほしい、と体が訴えている。

「これから毎日、ここを開発する」

涼介が透真の耳元で囁いた。

透真は答える力もなく、ぐったりとシートに凭れた。

窓ガラスに映る自分は、完全に乱れていた。

服を脱がされ、精液まみれで、目は涙で濡れている。

窓ガラスにも精液が飛び散って、白く汚れている。

こんな姿を見せてしまった。

涼介に、全部見せてしまった。

「着いた」

車が止まった。

いつの間にか、高級マンションの地下駐車場に入っていた。

「歩けるか」

「わから、ない」

涼介が透真を抱き上げた。

お姫様抱っこ。

恥ずかしくて顔を隠した。

「これから俺の家で、お前を一から教育する」

涼介の声が、少し震えていた。

「覚悟しろ」

第3話 調教初日

エレベーターが最上階で止まった。
涼介に抱えられたまま、透真は廊下を運ばれていく。
高級マンションの静かな空気。
自分の足音すら聞こえない。
厚いカーペットが、全ての音を吸収しているようだった。

「ここだ」

涼介がドアの前で立ち止まった。
カードキーをかざすと、重厚な扉が開く。
中は暗かった。

部屋に入ると、自動で照明が点いた。
広いリビング。天井が高い。
大きな窓から夜景が見える。
高層階ならではの眺望。
東京の街が、宝石箱のように輝いていた。
まるで別世界だった。

「下ろして」

「まだ歩けないだろ」

「歩ける」

強がりだった。
腰が抜けているのは自分でも分かっている。
車の中で二回もイカされた。
足に力が入らないのは当然だ。
でも、いつまでも涼介に抱えられているのは恥ずかしかった。

涼介が透真をソファに下ろした。
革張りの高級ソファ。
座った瞬間、体が沈み込んだ。
柔らかい革の感触が、疲れた体に心地よかった。

「水、飲むか」

涼介がキッチンに向かった。
グラスに水を注いで、戻ってくる。
透真は黙ってそれを受け取り、一気に飲み干した。

「喉、乾いてたんだな」
「うん」

短い返事。
何を話せばいいのか分からなかった。
ここは涼介の家。
これから自分は、ここで暮らす。
涼介のものとして。

「シャワー浴びるか」
「うん」
「その前に、渡すものがある」

涼介がリビングの棚から何かを取り出した。
近づいてきて、透真の目の前に差し出す。

首輪だった。
黒い革製。
中央に小さな金具がついている。
シンプルだが、高級そうな作り。

「これは」
「お前の首輪。今日からこれをつけてもらう」

透真は首輪を見つめた。
犬や猫につけるようなもの。
それを自分がつける。
所有物の印。

「嫌、なら」

涼介の声が揺れた。

「無理にとは言わない。でも、つけてほしい」

透真は涼介の顔を見上げた。
涼介の目が、真剣だった。
同時に、どこか不安そうでもある。
断られることを恐れている顔。
あの涼介が、こんな顔をするなんて。

「分かった」

透真は首輪を受け取った。
涼介の目が、大きく見開かれる。

「いいのか」

「涼介が、そうしたいなら」

自分でも驚くほど素直な言葉が出た。
涼介に買われた。
それはもう変えられない事実だ。
なら、せめて涼介の望みに応えたいと思った。
高校のとき、遠くから見ているだけだった相手。
その人が、自分を求めている。
それが、どこか嬉しかった。

首輪を首に巻く。
金具をカチリと留める。
革の感触が、首筋に馴染んだ。
思ったより軽い。
でも、確かにそこにある。

「似合う」

涼介が呟いた。
その声が震えている。

「すごく、似合う」

涼介の手が、透真の首輪に触れた。
金具を指でなぞる。
まるで宝物に触るように、丁寧に。

「これからのルールを説明する」
「ルール」
「三つだけだ」

涼介が透真の前にしゃがんだ。
目線を合わせてくる。
真剣な表情。

「一つ目。俺の許可なく服を着るな」
「え」
「この家の中では、俺が許可するまで裸でいろ」

透真は言葉を失った。
裸で過ごせ、ということだ。
涼介の前で、ずっと。
恥ずかしい。
でも、拒否する言葉が出てこなかった。

「二つ目。名前を呼ばれたら返事をしろ。『はい』でいい」
「はい」
「そう、それでいい」

涼介が透真の頬を撫でた。
優しい手つき。

「三つ目。嘘をつくな。何を聞かれても、正直に答えろ」
「正直に」
「気持ちいいときは気持ちいいと言え。嫌なときは嫌だと言え」

涼介の目が、真剣だった。

「お前の本当の声が聞きたい。作り物じゃなくて」

透真は頷いた。

三つのルール。
裸でいること。返事をする事。嘘をつかないこと。
それが、これからの生活の決まり。
支配と服従。
でも、涼介の声は優しかった。

「じゃあ、脱げ」

涼介が立ち上がった。
透真を見下ろしている。

「今すぐ」

服を脱ぐ手が震えていた。
シャツのボタンを外す。
一つ、二つ、三つ。
涼介の視線が、透真の体を追っている。
熱い視線。
それが肌に触れているような感覚。

「全部だ」

シャツを脱いだ。
ズボンを下ろす。
下着に手をかけて、ためらった。

「どうした」

「見ないで、ほしい」

涼介が首を傾げた。

「さっき車の中で全部見ただろ」

「それは、その」

「恥ずかしいか」

透真は頷いた。

涼介が近づいてきて、透真の顎を持ち上げた。

「恥ずかしがってるお前も、好きだ」

そう言って、涼介が透真の下着に手をかけた。

ゆっくりと引き下ろされる。

透真のペニスが、涼介の目の前に晒された。

まだ柔らかい状態。

でも、涼介の視線を感じて、少しずつ反応し始めていた。

「もう反応してる」

涼介が呟いた。

確かに、透真のペニスは半分勃起していた。

恥ずかしさと、涼介への期待が混ざり合っている。

「ベッドに行くぞ」

涼介が透真の手を取った。

リビングの奥、寝室へと導かれる。

大きなベッド。白いシーツ。

キングサイズはある。

透真は全裸のまま、その前に立った。

「仰向けに寝ろ」

命じられるままに、ベッドに横たわる。

白いシーツが、裸の体に触れた。

冷たくて、気持ちいい。

高級な素材の感触が、肌に心地よかった。

涼介がベッドサイドに立った。

スーツのジャケットを脱ぎ、ネクタイを緩める。

シャツの袖をまくり上げた。

その腕は、思ったより筋肉質だった。

「今日は、お前の体をもっと知りたい」

涼介がサイドテーブルから何かを取り出した。
ローションのボトル。
車の中で使ったのと同じもの。

「足を開け」

透真は両足を開いた。
恥ずかしい格好。
股間が涼介に向かって晒されている。

「もっと」

もっと開け、ということだ。
透真は足をさらに広げた。
ペニスと、その奥の睾丸、そして後孔まで見えてしまう体勢。
涼介の視線が、透真の全てを捉えていた。

「いい眺めだ」

涼介が呟いた。
その目が、透真の股間に釘付けになっている。
喉が鳴る音が聞こえた。
涼介も、興奮しているのだ。

「今日は、自分でやってみよう」

「自分で」

「そう。自分の手で、尻を開け」

透真は息を呑んだ。
自分で開けというのは、つまり。

「両手で尻たぶを掴んで、後ろの穴を見せろ」

涼介の声が低くなった。
命令。
絶対的な。

「それは」

「できないか」

涼介が透真を見下ろしている。
その目に、期待と欲望が渦巻いていた。
拒否できる空気ではなかった。
拒否したくない自分もいた。

透真は手を動かした。
自分の臀部に手を伸ばす。
柔らかい肉を掴む。
そして、ゆっくりと左右に開いた。

「もっと開け。俺に見せろ」

涼介の声が震えている。
透真は力を込めて、臀部を開いた。
後孔が、涼介の目の前に晒される。
ひくひくと、穴が収縮した。

「見えた。お前の穴」

涼介が息を呑む音が聞こえた。

「ピンク色だ。綺麗。さっき指入れたのに、もう元に戻ってる」

恥ずかしさで死にそうだった。
自分で自分の後孔を見ている。
こんな屈辱的なこと、したことがない。
でも、涼介の視線を感じると、体が熱くなった。

「そのまま。手を離すな」

涼介がベッドに上がってきた。
透真の足の間に入り込む。
ローションを手に取り、指にたっぷりとかけた。
透明な液体が、涼介の長い指を濡らしていく。

「今から、お前の体を全部触る」

涼介の指が、透真の太ももに触れた。
ぬるりとした感触。
冷たいローションが、肌に広がっていく。
内側をゆっくりと撫で上げられる。

「あっ」

敏感な場所だった。
太ももの内側は、普段触られることがない。
だから余計に感じる。
ぞくぞくとした快感が、背筋を駆け上がった。

「ここ、柔らかいな。女の子みたいだ」

涼介の指が、太ももの内側を何度も往復した。
ひざの近くから、股間の近くまで。
でも、ペニスには触れない。
すぐそばまで来て、またひざの方に戻っていく。
焦らされている。

「涼介」

「何」

「もっと、上」

透真は自分の言葉に驚いた。
もっと上を触ってほしい、と言ってしまった。
ルールだ。
正直に言わなければならない。

「どこを触ってほしい。具体的に」

「その」

「ちゃんと言え。嘘つくなって言っただろ」

透真は唇を噛んだ。
恥ずかしい。
でも、言わなければ触ってもらえない。

「ペニス、触って」

小さな声で答えた。

涼介が笑った。

意地悪な笑み。

「お預けだ。まだ触らない」

透真は眉をひそめた。

涼介の指は、執拗に太ももの内側を撫で続けた。

左足、右足、交互に。

ローションがたっぷりと塗り込まれ、太ももがてらてらと光っている。

「ここがこんなに敏感だとは思わなかった。お前の体、本当に面白い」

ローションが温まって、ぬるぬると滑る。

太ももの内側から、少しずつ上へ。

会陰部へと指が移動していく。

「ここは」

涼介の指が、睪丸と後孔の間を撫でた。

会陰部。

触られたことのない場所。

「ひあっ」

体が跳ねた。

予想以上の快感だった。

電流が走ったみたいに、全身がびりびりと痺れた。

「ここも弱いんだな。いい発見だ」

涼介が会陰部を指の腹で押した。

ぐりぐりと円を描くように刺激される。

内側から、何かが押し上げられるような感覚。

「やっ、そこ、変っ」

「変？　気持ちいい間違いだろ」

涼介の指が止まらない。
会陰部を押しながら、もう片方の手で太ももの内側を撫でる。
二つの刺激に、透真の腰が浮いた。

「尻から手を離すな」

涼介に注意される。
透真は必死に臀部を開き続けた。
その姿勢で、会陰部を責められている。
自分で恥ずかしい場所を見せながら、そこを攻められる屈辱。
恥ずかしくて、気持ちよくて、頭がおかしくなりそうだった。

「後ろも触るぞ」

涼介の指が、後孔の周りを撫でた。
ぴくり、と穴が反応する。
涼介の指を招き入れようとして、ひくひくと動いた。

「さっき俺の指が入った場所。覚えてるか」

「覚え、てる」

「また入れてほしいか」

透真は首を振った。
恥ずかしい。
自分から入れてほしいなんて、言えない。
でも、体は正直だった。
後孔がひくひくと動いて、涼介の指を求めている。

「嘘つくなって言った」

涼介の声が厳しくなった。

「本当は？」

「入れて、ほしい」

絞り出すように答えた。